

J **apanese text**

2016年 春/夏号 日本語編

ガラス

**うるわしのガラス器：
新時代の到来**

写真＝鈴木一彦 文＝編集部
協力＝井伊左千穂、井上典子
スタイリング＝横瀬多美保
料理＝久保香菜子

p.063

ガラスは不思議な存在だ。透明、半透明、不透明、薄くやわらかく繊細にも、厚く直線的で重々しくもなれる。紀元前の作品が今なお残るほど、劣化・風化に強い材でありながら、簡単に碎けるほど脆くもある。変幻自在なガラスに、国内のガラス作家たちの才能が立ち向かい、今世界で大きな注目を集めている。冷たく熱い彼らの物語を紹介しよう。

(p.063)

左ページ・左上より時計回りに、

飯塚亜裕子さんの大鉢：ガラスの粉に、色材と粘着材を加えて練り混ぜ、型に詰めて窯で焼き上げる「パート・ド・ヴェール」技法を使用。アールヌーヴォー期に流行した秘術で、多くの手間がかかる。

橋村大作さんの浅鉢：氷裂状の割れ目を作り、再び焼きなおすアイスクラックという技法を使用。16世紀頃に生まれた技法で、厚手で重量感のある美しさに定評がある。

中村敏康さんのグラス：日本の伝統工芸である切子細工でも使われる高度なカットワークを用いながら、直線の幾何学模様にとどまらない、モダンで大胆なデザインを生み出している。

加倉井秀昭さんのボウル：レースガラスという手法で、格子の間に規則的に気泡が入った緻密なデザイン。

左：飯塚亜裕子さんの大鉢は、自然に溶け込む野の花の装飾が美しく、夏のガーデンパーティにも最適。ドレッシングを入れているのは東敬恭さんの片口鉢。軽くて注口がシャープ。水ぎれもよい。

ガラス作家たち・新世代

文＝井上典子

p.064

日本のガラス工芸界が今、面白い。どこにも似通ったものがない、独自の扉が開かれつつある。

実は少し前までガラスは、国内の工芸界では異端であり少数であった。教育機関もほとんどなく、陶磁器や漆器に比べれば、マーケットサイズも驚くほど小さい。作家といえる人も少なかった。しかし20年くらい前からぼつぼつと手がける人が増え始め、さらにこの5、6年で一気に新風が吹き込んでいる。欧州や米国の技術を習得したうえで、まったく別の角度からアプローチするような、日本人の感性で自由に表現した作品が目立ってきたのだ。p.66に続く山本 茜さんの作品もしかり。「^{きりかね}載金」という古来の装飾技法をガラスの中に封じ込めるなど、美と技の結集が世界をあっと思かせた。独創的で飛翔するような美の誕生である。

暮らしの器にも同じことがいえる。特集の扉に掲載したような、新しいデザインの切子、厚手で端正なアイスクラック、軽やかなパート・ド・ヴェール、高い技術を要するレースガラスなど、次々と華のある美しいガラス器が現れ、しかも料理を盛る器としての「用の美」をきちんと備えている。器に関して独特な歴史文化を持つ、日本独自のものがようやく生まれてきている。これこそが、ガラス器の新時代到来といえる所以である。

こうした流れの背景には、公の教育機関や施設の充実のほか、陶磁器に比べて歴史が浅いがゆえに、伝統的意匠にとらわれない自由さがあげられる。いくつかの技術を組み合わせる新しい表情をつくり出す作家や、陶芸・漆芸・染色など異なるジャンルのキャリアを有し、今までにない手法や形を生み出す作家など、「かくあるべき」という縛りがなく、彼らの才能を開花させたのだ。

美しさを生み出す作家の技量とは「造形」、「技術」、「コンセプト」、そして「センス」。そのそれぞれに優れ、かつ全体のバランスがとれていることだと私は思っている。技術が素晴らしいからといって、必ずしも美しい器になるわけでは

ない。美しさの背景には確かな技術の裏づけがあるのだが、それに加え今人気のガラス器には、どれにも一目見て引き寄せられる強烈な吸引力や、説明を必要としない感動、洗練された趣味のよさが漂う。思わず手にとってみたくなる、盛りしたい料理が浮かんでくる、見たことのない新しさに心が躍る。

ものの溢れる時代に生まれ、美しいものに囲まれて育った気鋭の作家たち。ガラスに惹かれ、使えるもの、使いたいもの、そして美しいものを目指す作家の奮励努力が、今後も私たちの食卓を豊かなものにしてくれるに違いない。

井上典子 (いのうえ・のりこ)

女性誌の編集者を経て、リビング分野の企画・プロデュース業へ転身。2000年にガラスを主とする「ギャラリー一介」を開くも、2008年に惜しまれながらクローズ。現在はフリーランスで作品展の企画プロデュースや、ガラス作家たちの教育を行っている。

(p.065)

塚田美登里さんの「ナチュラルレース」

「目下のテーマは自然」と言う塚田さんが、自然の中にあるレースのような表情をくみ取り、銀や銅の金属箔の焼付け温度を研究することで、複雑な色や泡の表情を作り上げた。緊張感のあるフォルムは、何日も熱と重力をかけ、自然に委ねた結果。発想と表現の独創性、そして抽象性の高い奥深さは、見るものを思索の世界へと誘う強い力がある。(幅39×奥行き13×高さ13cm) 8万6000円。

塚田さんは1972年岐阜県生まれ。富山県富山市在住。2013年には国際ガラス展・金沢にて金賞受賞。2014年にロンドンのアートフェア「コレクト」に出展。作品は金沢21世紀美術館や東京ミッドタウンに収蔵されている。

歴史に名を残すガラス

p.065

大英博物館には紀元前に製造された「金箔入りガラス碗」が収められている。2層のガラスの間に金箔が挟まれているのだが、実はこの作品の溶着は不完全なままである。ガラスの曲面溶着は非常に困難で、溶着による完璧なゴールドサンドウィッチ碗を完成させるのは人類の夢であった。

それを実現させたのが、山本 茜さん。金やプラチナの箔を極細の線状にしたものを使って文様を形づくる「載金」と呼ばれる技法に魅せられ、この美しい装飾をガラスに封じ込めることを着想。試行錯誤を重ね、空間の中で金箔の煌めきが浮遊する、立体的な「載金ガラス」を編み出した。とはいえガラスと金の溶解温度は非常に近く、少しでもタイミングを誤ると金模様がくずれてしまう。窯の温度が上がるスピードや、作品の大きさとの兼ね合いなど、膨大なデータを積み重ねた。その甲斐あって2014年に出品したロンドンのアートフェア「コレクト」では、「見た目が美しいだけでなく、英国のガラス工芸家が畏敬の念を抱く高い技術」と絶賛された。高度な技術に裏づけられ、さらなる独創的な作風を開拓する山本さんたち新世代の作家たち。21世紀に生きる稀有な才能は、ガラス工芸史に着実に足跡を刻み続けている。

山本 茜さんの「載金硝子抹茶碗 朝顔」

光を透かして煌めく載金の文様が2層のガラスに挟まれている。金箔は焼かずに、ガラスだけが完全に溶ける温度を探りながら曲面溶着し、碗の形に削り出した。(径16.7×高さ7.5cm) 個人蔵。

山本さんは1977年石川県生まれ。京都市在住。ガラス内部に載金を封じ込める「載金ガラス」を創出。2008年より数々の賞を受賞し、2015年には伝統文化ポーラ賞・奨励賞を受賞。作品は宮内庁や富山市に収蔵されている。

(p.067)

「載金硝子皿 ^{はなぐるま}花車」梅の花の香りが広がる様子を表している。(径26×高さ3.8cm) 200万円(ギャラリーNOW)。

若き才能のゆらめき

p.068

まるで本物のような蜂や蝶が、アジサイの周りを舞う精妙な絵付け。入れたお菓子の色が透けて、そのつど印象が変わる。

作家の林 佳慧さんは制作当時24歳。若手ながら抜群の探究心と絵付けのうまさ。蜂などは死骸を拾って自宅でデッサンを重ね、ほんものそっくりの姿に仕上げる。季節は6月、美術大学への道すがら目にするアジサイやカタツムリがメイ

ンモチーフとなった。

林さんの作品づくりはやや独特。まず心惹かれる過去の名作を見つける。いまだに製法が謎のままのものも多いそれらを範に、実際に同形の品を作り上げ、オリジナルの絵付けを施す。そうすることで、研究書だけでは学べない古の技法の習得や研究ができ、かつもつとも得意とする絵付けで作品に個性を与えられる。ある意味非常に学生らしく、また研究者らしいアプローチである。

今年3月に修了する大学院の卒業展示では、プラチナ箔を使ったゴールドサンドウィッチグラスの復元12点に、12カ月の季節を、猿が主役のコミカルな絵付けで表現した。卒業後の進路はまだ未定。なんと修復師の道も考えているという。ガラス材料やレンタル工房はあまりに高価で、作家への道は楽ではない。しかし「光をこんなに大切にしている素材はほかにない」と目を輝かせる林さん。小さい頃に夜店で見かけたガラス細工の煌めきに心躍らせた記憶が、今も彼女を突き動かしている。

(p.069)

林 佳慧さんの「あじさいもんだんぼう紫陽花文三段重」(径10.5×高さ19cm) 非売品。

林さんは1989年東京都生まれ。東京都在住。2014年多摩美術大学工芸科ガラス専攻卒業。2016年3月、東京藝術大学大学院 修了予定。植物や昆虫をモチーフとした作品が多く、繊細でみずみずしい感性に溢れている。

サイドテーブル／IDC 大塚家具

食卓を彩るガラス器

p.070

カラフルなゆらぎが美しい加倉井秀昭さんのボトルと片口鉢をアクセントにした、夏のテーブルセッティング。ガラスの棒をねじりながら吹くことで、美しい波模様を生み出した。氷や水を入れると、いっそうきらきらと涼しげに煌めく。一方、皿の上に鎮座するのはマットな質感が美しいパート・ド・ヴェール技法で作られた波多野裕子さんの浅鉢。「朝顔」と名づけられ、足元はすっきりとモダンである。

豊かな表情を持つガラス器は、アミューズブーシュに限ら

ず、前菜やメイン、ティータイムと、さまざまなシーンで活躍し、どんな素材とも相性がいい。さまざまな表情の器が、食卓を豊かに、個性的に彩ってくれる。

(p.071)

ボトル (径7×高さ33cm) 6万円、片口鉢 (径16.5×高さ8cm) 2万8000円、タンブラー右 (径8×高さ11cm) 1万8000円、タンブラー中央 (径8×高さ9cm) 2万8000円、タンブラー左 (径8×高さ11.5cm) 2万3000円／すべて加倉井秀昭

皿にのせた浅鉢 (径13.5×高さ4cm) 6400円／波多野裕子

ベネチアグラスを写した一点もののゴブレット (口径3.5～9.5×高さ22～25cm) 2万2000円～2万4000円／関野亮

ディナー皿・デザート皿・ナブキン／アトリエ ジュンコ

カトラリー／エルキューイ・レイノー青山店

日本酒にぴったりのぐいのみ。幾つか用意して、ゲストに選んでもらうのも乙。ワインと同じく、酒器によって変わる味を楽しみたい。

左奥から時計回りに、グリーン (径7×高さ4.5cm) 4000円／東敬恭

透明カット (径5.5×高さ6cm) 3600円／大迫友紀 高台付き黒 (径7×高さ4cm) 6000円、高台付き金 (径7×高さ4cm) 6000円、グレー (径7.5×高さ4cm) 3500円／すべて橋村大作

盆・ランナー／ともにアトリエ ジュンコ

シンプルなカットの筒形片口に、彩り豊かな夏野菜の浅漬けを入れることで、食卓にみずみずしさが溢れる。直接ピックで取っても、漬け汁とともに取り分けてもよし。

片口 (径10.5×高さ11.5cm) 5000円／大迫友紀

魅惑の蓋物

p.072

どことなく秘密めいて不思議な魅力を放つ蓋物。宝石箱のような、もっと大切な心の内のような。透明や半透明の光沢を持つガラスは、そんな蓋物にぴったりの素材。思わず掌にのせて、時には光にかざして、じっと眺めていたくなる。

(p.072)

左奥より時計回りに、

1.「浮く」という作品名のとおり、のびのびとしたラインと形が印象的。(径13×高さ7.5cm) 4万円 2.若々しい印象を与える大胆なカットが魅力

の蓋物。(径 6.5 × 高さ 9.5cm) 2 万 2000 円／ともに山本真衣
 3. 「種の箱」と名づけられた独特のフォルムと質感。(径 7.5 × 高さ 5cm)
 2 万 5000 円 4. さまざまな色合いの青いラインを閉じ込めた、吸い込
 まれそうな入れ物。(径 6 × 高さ 5.5cm) 2 万 5000 円 5. やわらかな色
 合いを集めて作られたハニカム文様。(径 5.5 × 高さ 5.5cm) 3 万円/
 すべて^{まつ おい ちゅう}松尾一朝
 6. 透明感が美しい、キュートな茶入れ。(径 6 × 高さ 7.5cm) 1 万 3000
 円 7. 中に入れたものがうっすらと透けて表情を変える器。(径 4 × 高
 さ 9.5cm) /ともに^{めかた ち え}目片千恵
 お盆／リビング・モティーフ

(p.073)

石田征希さんの蓋物

見るものすべてを膚にする繊細な装飾。古くから伝わるパート・ド・ヴェール技法を用いながらも、日本の古典柄から着想を得、アールヌーヴォー期とはまったく違った繊細な作品を作り上げる。女性作家ならではの、やわらかさと気品に溢れた逸品。(径 9 × 高さ 7.5cm) 50 万円

ガラス研究最前線

p.075

もとは建築家であった。建築の空間構成のためにいつかガラスを勉強するつもりが、その変幻自在な魅力と自由さに惹かれ、気づけばどっぷりとガラスの世界に身を投じ、戻れなくなっていた。

そう語る^{あだちまさお}安達征良さんが作り上げるのは、ほかのどこでもお目にかかったことのないガラス器。ガラスでできたものを表す擬音、つるつる、ぴかぴか、もしくはざらざら、そのどれもが安達さんの器には当てはまらない。初めて見たときの感覚を音にするなら、ふわふわ。およそガラスとは結びつかない音だ。しかしそれもそのはず、安達さんがこの「絹糸紋」と呼ばれる作品群を作り始めた最初のイメージは「繭」なのだという。極細の線が無数に集まり、しかし全体としてはしっかりとした形を作り上げる繭。追い求めていた「ガラスのやわらかさ」を表すのにぴったりだと感じた。

安達さんがガラスの勉強を始めたとき、身体に叩き込まれたのは切子に使われるカットング技法。いかにまっすぐに直線を削り込むかが命題であった。しかしボヘミアンガラス

の勉強でチェコに 1 カ月滞在したときに悟った。「カットングガラスの根っこはヨーロッパだ。同じことを模倣しても仕方がない。それよりも日本の陶器のやわらかさや経年変化の魅力を、ガラスで表現できないか」

安達さんの研究が始まった。なにしろそのようなガラスは見たことがない。手探りで「サギング」と呼ばれる古代の技法にたどり着いた。何度も温度を変えて、ガラスがもっとも美しく自然に湾曲するポイントを探った。垂れてきたガラスを、軽くて使いやすい器にするための削り出し方をさぐった。削られて透明ではなくなったガラスを、ぎりぎり表面だけ溶かして艶を出す温度と時間を探った。カットング技法を用いながらも、ゆらぎのあるやわらかい表現ができないかを探った。細心の注意を払いながら、すべてを結集して作り出したのが「絹糸紋」の作品である。

でき上がったガラスの抹茶碗は、茶の湯の大家にも認められるものとなった。「今作りたのは足付きの水盤です」と語る安達さん。数多くの固定概念を覆しながら、今日もガラス表現の可能性を広げている。

(p.074)

上：^{ひずい}翡翠のようにも見える薄いグリーンガラス皿。フリーハンドで削られた繊細な刻み文様が、微妙なゆらぎとやわらかな表情を生む。硝子絹糸紋皿(径 24 × 高さ 2cm) 3 万円、硝子絹糸紋鉢(径 18.5 × 高さ 6cm) 1 万 6000 円／ともに安達征良

バターナイフ／チェリーテラス・代官山

左：器下部の黒は、原料から独自に配合した黒ガラスを何重にも塗っては焼いて作り上げる。使い込むほどにしっとり艶を増し、経年変化する稀有なガラスである。奥から：黒硝子絹糸紋端反口鉢(径 18.5 × 高さ 7cm)、黒硝子絹糸紋盃(径 7.5 × 高さ 6cm)、黒硝子絹糸紋碗(径 13 × 高さ 6cm) 各 5 万円／すべて安達征良

(p.075)

絹糸紋を刻む安達さん。通常の切子作業とは逆に、器の口側から小さな刃を当てていく。一瞬でも気を抜けば、ガラスの自重で必要以上に深い刻みができてしまうため、細心の注意が必要だ。作業中はまばたきはもちろん、呼吸も制限するというが、それでも心臓の鼓動が微妙なゆらぎを生み、美しいよけ文ができて上がる。

作品と出会う場所

作家名はすべてアルファベット順に掲載しています。
最初に日付があるもの以外は、通年取り扱いのある店舗です。

■安達征良 (Masao Adachi)

高島屋日本橋店 7階 特選工芸サロン

東京都中央区日本橋 2-4-1

Tel. 03-3211-4111 (代)

(6月8日～14日に個展も開催)

たまきしげ

玉匣

石川県金沢市東山 1-14-7

info@gemnaka.co.jp

7月24日～8月2日 新宿タカシマヤ 個展

東京都渋谷区千駄ヶ谷 5-24-2

Tel. 03-5361-1111 (代)

■東 敬恭 (Yukiyasu Azuma)

azzyuki.exblog.jp

エポカ ザ ショップ 銀座・日々 にちにち

東京都中央区銀座 5-5-13-B1

Tel. 03-3573-3417

Fax 03-3575-0370

ギャラリーティーケーアール

大阪市中央区西心斎橋 1-10-5

Tel. 06-6282-1456

Fax 06-6282-1457

(4月29日～5月9日に個展も開催)

4月11日～19日 手児奈 てこな 個展

名古屋市中区千代田 3-14-22 杉浦ビル 2F

Fax 052-332-0393

■橋村大作 (Daisaku Hashimura)

glass-studio206.jimdo.com

三越恵比寿店 1階 クロスイー

東京都渋谷区恵比寿 4-20-7

Tel. 03-5423-1111 (代)

東慶寺ギャラリー&ショップ

神奈川県鎌倉市山ノ内 1367

Tel. 0467-50-0460

gallery@tokeiji.com

かたくち屋 (Katakuchi Ya)

www.katakuchi.jp

contact@katakuchi.jp

(Paypal 入金、海外発送も相談可)

■波多野裕子 (Hiroko Hatano)

www.instagram.com/hiroko_hatano/

dadacrafts.cocolog-nifty.com/hatanote/

ギャラリー Fuuro

東京都豊島区目白 3-13-5

Tel. 03-3950-0775

mail@gallery-fuuro.com

6月17日～22日 ぎやらりー無垢里 二人展

東京都渋谷区猿楽町 20-4

mukuri_g@yahoo.co.jp

7月15日～28日 スパイラルマーケット「家×クラフト展」

東京都港区南青山 5-6-23 スパイラル 2F

Tel. 03-3498-5792

■林 佳慧 (Kae Hayashi)

ギャラリー かい 介

Tel. 090-6511-4103

kai@earth.email.ne.jp

(現在、販売は行っておりません)

■飯塚亜裕子 (Ayuko Iizuka)

和光本館地下1階

東京都中央区銀座 4-5-11

Tel. 03-3562-2111 (代)

(3月16日～29日に個展も開催)

グラスギャラリーカリス

東京都港区南青山 5-3-10 FROM-1st ビル 2F
Fax 03-3406-1440
karanis@carrozzeriajapan.co.jp

■石田征希 (Seki Ishida)

www.ishida-glass.com

イシダガラススタジオ

京都市左京区一乗寺葉山町 15-8
info@ishida-glass.com

7月13日～19日 高島屋京都店 6階 美術画廊

「石田知史・亙・征希パート・ド・ヴェール作品展」
京都市下京区四条通河原町西入る真町 52
Tel. 075-221-8811

■加倉井秀昭 (Hideaki Kakurai)

scratchandnoise.com

Scratch & Noise 加倉井硝子製作所

長野県諏訪郡富士見町落合篤木河原 2028-1
scratchandnoise@gmail.com

高島屋日本橋店 6階 美術画廊

東京都中央区日本橋 2-4-1
Tel. 03-3211-4111 (代)

ギャラリー坂

東京都新宿区築地町 2
Tel. & Fax 03-3269-8330
info@gallery-saka.com

■松尾一朝 (Itcho Matsuo)

itcho.web.fc2.com

ギャラリー坂

東京都新宿区築地町 2
Tel. & Fax 03-3269-8330
info@gallery-saka.com
(6月30日～7月5日に個展も開催)

3月9日～14日 松屋銀座店 7F グループ展

東京都中央区銀座 3-6-1
Tel. 03-3567-1211 (代)

4月1日～10日 WATERMARK arts&crafts 個展

東京都国立市東 2-25-24 工藝火水土 2F
Tel. 042-573-6625
info@watermark-arts.com

■目片千恵 (Chie Mekata)

ギャラリーうつわノート
埼玉県川越市小仙波町 1-7-6
utsuwanote@gmail.com

**ひたむき
ギャラリー直向**

京都市中京区寺町通御池上る
info@hitamuki.com

7月22日～28日 トライギャラリーおちゃのみず

東京都千代田区神田駿河台 3-5
akeyo@labline.tv

■中村敏康 (Toshiyasu Nakamura)

www.studio-kobin.com

会津屋

東京都文京区小石川 2-23-13
info@aizuya.co.jp

悠遊舎ギャラリー

愛知県刈谷市半城土町大湫 99-3
gallery@you-yuusyaya.com

エリアス

大分県日田市豆田町 7-20
Tel. & Fax 050-1048-7757

■大迫友紀 (Yuki Osako)

oosakoyuki.web.fc2.com

poool

東京都武蔵野市吉祥寺本町 3-12-9

info@pool.jp

(7月2日～10日に個展も開催)

生活雑貨 LINE

石川県金沢市広坂 1-1-50-2F

line@adagio.ocn.ne.jp

3月4日～13日 パバグーリ本店 個展

東京都江東区清澄 3-1-7

Tel. 03-3820-8825

■関野亮 (Ryo Sekino)

www.ryosekino.com

ギャラリー AMISU

滋賀県長浜市元浜町 11-23

Fax 0749-65-2333

gallery-amisu@kurokabe.co.jp

(5月3日～29日に二人展も開催)

伊勢丹新宿店 本館 5階 リビングフロア ウエストパーク (YotoBI)

東京都新宿区新宿 3-14-1

Tel. 03-3352-1111 (代)

Abundante Gallery

兵庫県芦屋市精道町 5-3 精道アパート 301

info@abundante.jp

■塚田美登里 (Midori Tsukada)

ww3.ctt.ne.jp/~tsukada

銀座一穂堂

東京都中央区銀座 1-8-17 伊勢ビル 3F

Tel. 03-5159-0599

(6月16日～25日に個展も開催)

ギャラリー NOW

富山県富山市開 85

Tel. & Fax 076-422-5002

info@g-now.com

4月16日～7月初旬 富山市ガラス美術館 「現代ガラス作家展」

富山県富山市西町 5-1

Tel. 076-461-3100

toyama-glass-art-museum.jp/en

■山本茜 (Akane Yamamoto)

akane-glass.com/english

ギャラリー NOW

富山県富山市開 85

Tel. & Fax 076-422-5002

info@g-now.com

Adrian Sassoon

14 Rutland Gate, London SW7 1BB, UK

(By appointment: email@adriansassoon.com)

www.adriansassoon.com

5月25日～31日 高島屋日本橋店 6階 美術画廊 個展

東京都中央区日本橋 2-4-1

Tel. 03-3211-4111 (代)

■山本真衣 (Mai Yamamoto)

maiyamamoto-glass.jimdo.com

Micheko Gallery

Theresienstr. 18, 80333 München, Germany

www.micheko.com

西武渋谷店 B館 8階 アートショップ

東京都渋谷区宇田川町 21-1

Tel. 03-3462-3485

グラスギャラリー カラニス

東京都港区南青山 5-3-10 FROM-1stビル 2F

Fax 03-3406-1440

karanis@carrozzeriajapan.co.jp

(11月12日～19日に個展も開催)

ほか問い合わせ先：

アトリエ ジュンコ

atelier-junko@nifty.com

チェリーテラス・代官山

Tel. 03-3770-8728

www.cherryterrace.co.jp

エルキューイ・レイノー

www.ercuis.com

IDC 大塚家具 有明本社ショールーム

Tel. 03-5530-5555

リビング・モティーフ

Tel. 03-5575-8383 www.livingmotif.com